

九州地方で絶滅認定

カワウソノ絶滅！ この見出しがニュースで話題になったのは、今年八月末でした。これは環境省が改訂した第四次レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）において、ニホンカワウソを絶滅種に分類したことに基づいており、このほかにゲンゴロウやハマグリが新たに絶滅危惧Ⅱ類に分類されるなど、身近な動物に絶滅の危機が迫っていることを思い知らされました。レッドリストの改訂は多くの調査・研究の成果が反映されていますが、今号と次号でレッドリストの改訂に大きく影響した森林総合研究所の研究成果について紹介します。

今回は九州地方のツキノワグマが絶滅と認定された話題です。

ツキノワグマと聞くと、近年各地で人里への出没が話題となり、個体数が増えているような印象を持たれる方も多いでしょう。しかし、九州地方では江戸時代末期にはすでにクマが少なくなっていたと考えられおり、一九四一年（昭和一六年）にオス成体が捕獲され、一九五七年（昭和三二年）に幼獣の死体が発見されて以降、全く報告がありませんでした。ところが、それから三〇年を経た一九八七年（昭和六二年）に大分県でオスが捕獲され、この個体が九州地方の最後のツキノワグマとされてきました（写真1）。

この九州最後のクマは三〇年ぶりの捕獲ということもあり、研究者や行政などによって調査が行われ、四歳のオス野生個体であるとされました。しかし、その出生については不明な点も多く、「野生である

ツキノワグマ

Ursus thibetanus

ことは間違いなく、また九州産である可能性は否定できない。「と曖昧な位置づけのままです。そのため、第三次

レッドリストまでは九州地方のツキノワグマは「絶滅のおそれのある地域個体群」として扱われていました。

森林総合研究所では本所・東北支所・関西支所が中心となって、本州各地で有害駆除によって捕獲されたツキノワグマの試料を収集し、これに四国地方で研究されている方々に提供していただいた試料を加えて、全国のツキノワグマの遺伝的な成り立ちをDNAを使って調べました。その結果、ツキノワグマには、青森から琵琶湖までの東日本グループ、琵琶湖から島根県までの西日本グループ、紀伊半島と四国の南日本グループの三つの大きな遺伝グループがあることがわかりました（図1）。さらに、東日本で確認された三八の遺伝的タイプのうちニタイプは広域に分布する祖先型であり、残りの三六タイプは数十km²の範囲で局所的に分布するタイプでした（図2）。この琵琶湖を境に東西に分かれ、さらに東日本で見られる局所的な分布パターンは数万年以上にわたって維持されてきたと考えられます。

九州最後のクマの組織が北九州市立自然史・歴史博物館に保存され



写真1 1987年に大分県で捕獲された九州最後のクマの剥製
提供：豊後大野市歴史民俗資料館

ていたことから、私たちはこれを提供していただき、遺伝解析を行いました。九州地方のツキノワグマの遺伝的組成はわかっていませんが、大陸から日本に渡来してきた経緯などから、西日本または南日本グループに属するタイプ、もしくはそれらに近いものだと推測されます。しかし、この九州最後のクマの遺伝タイプは東日本グループに属しており、福井県嶺北から岐阜県北部に局所的に分布するタイプでした。前述の通り、琵琶湖の東西で異なる遺伝グループは数万年以上にわたって続いており、九州で東日本グループの遺伝タイプが観察されたことは、人為的な移入があったこと以外に説明が付きません。このため、この九州最後のクマは本州から持ち込まれたか、持ち込まれた個体の子孫だと結論づけられました。

環境省のレッドリストでは野生絶滅の基準は「過去五〇年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない」としています。一九八七年の九州地方での最後の捕獲から見るとまだ二五年しか経っていませんが、我々の遺伝解析の結果からこのクマは九州地方由来の個体ではなかったこととなります。そのため九州地方における最後のクマの捕獲は一九四一年、確実な目撃記録は一九五七年が最後となり、五五年が経過したことを踏まえて、絶滅したという判断がされたのです。

このように九州地方のツキノワグマは絶滅という判定が下されたのですが、一方で地元では一般市民から「クマ」のような動

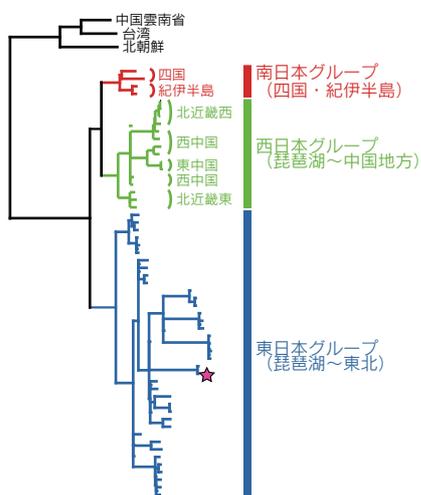


図1 遺伝タイプの系統関係
赤い星はDNA分析に基づく九州最後のクマの遺伝タイプ

物)を見た。」という情報が時折寄せられています。そこで今年の初夏から秋にかけて主にクマの研究者や専門家からなる「日本クマネットワーク」が大規模な生息調査を行いました。残念ながら九州のクマが100%絶滅したと言いつけるわけではありません。科学がもっとも苦手とするもののひとつとして、「無い」ということの証明があります。そのため五〇年という目安が作られているわけですが、我々国民に求められているのは絶滅したことの証明ではなく、そのような事態に至った経緯を反省し、それを繰り返さないことなのでしょう。

大西 尚樹
(東北支所主任研究員)

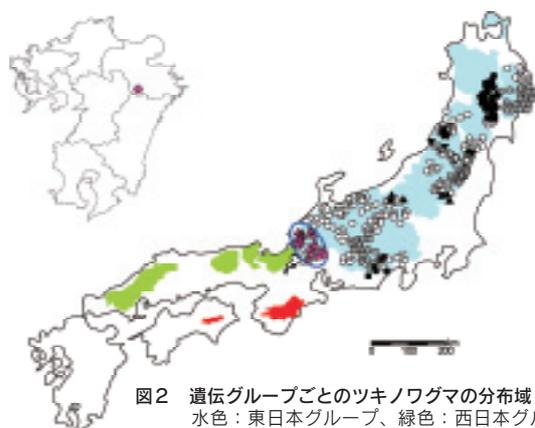


図2 遺伝グループごとのツキノワグマの分布域
水色：東日本グループ、緑色：西日本グループ、赤色：南日本グループ。東日本グループで確認されている全38タイプのうち主要な12タイプの捕獲地点をそれぞれのマークで示す。白丸は琵琶湖から東北地方にかけて広範囲で観察される。他のタイプは局所的に分布している。赤三角と楕円は九州最後のクマと同じ遺伝タイプを持つ個体の捕獲地点とその分布域。九州の地図の赤い星は九州最後のクマの捕獲地点。